『不二彦と柴三郎』～前編～
―医師会の創成期―

北区支部　池　本　吉　一

札医北区支部の総務の仕事を始めて、早4年。少しは医師会に愛着が出てきたせいであろうか、以前であれば医師会から送られて来るダイレクトメールなど、碌に読みもせず、一瞥するや、塵箱へ直行であるが、去年8月に出来上がった支部創立20周年記念誌は、自分がその編集に係わった事もあり、珍しくページを捲ってみたのだ。すると、記念誌の冒頭、一枚の記念写真が目に止まった。初代支部長、小林孝夫先生を中心に左右に設立当初の役員達が、顔を並べている。いつも決まって定例の役員会に出席してくる先生方の若き日のお姿が居並んでいる。未だ、顔と名前が一致しない先生が多い中、5期10年に亘り、支部長を務められた鈴木功先生、今は亡き、佐藤忠男先生や荒木貞敬先生、そして、もと札幌市医師会長の樋口　忠先生、まるで別人かと見違える位、若々しいではないか。やはり、医師会長ともなれば、色々と御苦労が多いのであろうか。一見してすぐ御本人と解ったのが、小野弘美元理事。変わらない。その写真の右下に、小さく設立年月日が記されている。昭和57年2月。私が、医学部を卒業した年である。このことが、私を、これから述べる問題に興味をひかせ、遠く古の昔へ引き込まれていく動機となった。

平成14年4月、史上初の保険診療報酬のマイナス改定、それに対する医師会の無力さ、医師会員の医師会に対する不信感、そして、それらが相舞って、増々、医師会活動の閉塞感が助長される。そもそも、札幌市医師会とは何なんだろう。その存在している意義とは、いったい何か。と、その時、はたと思い出した。たしか、4～5年位前に送られてきた札幌市医師会史。何か六法全書のように分厚く、とても読む気にはなれず、どこかに捨て去ってしまった。病院内を隅なく捜索活動を始めた。すると、それは意外にも、休憩室の片角に綿埃りを冠って、申し分けなさそうに佇んで居た。そうか、こういった本は、こんな機会でもなければ、一度も読まれる事もなく、人々の忘却の彼方へ葬り去られてしまうものなのか。厚さ10センチはあろうかと思われる本を開くと、これまた、一枚の写真。めがねを掛けた温厚そうな紳士、札幌市医師会、初代会長、関場不二彦と書いてある。明治40年―、へえー、札幌市医師会は、創業100年。初耳であった。この事が、パンドラの箱を開けるように、私の医師会に対する好奇心を呼びさましたのだった。

今より遡ること、130年以上、明治新政府は、北海道、樺太開発を目的として、開拓使を置き、明治2年、島義勇判官の一行が、札幌本府設営に着手、その時、同行した医官によって、札幌元村（今の元町地区）に仮病舎が開設された。旧松前藩や箱館を中心に、北海道は、江戸時代まで栄えてたが、未だ札幌は明治6年になって、やっと1000人を越える程度であった。当時、札幌は、あたかも、弥生時代のような、今の植物園の中のように、うっそうとしたジャングルで、開拓は困難をきわめた。当然、怪我や病気、ことに伝染病に悩まされた。そんな状況下、医療は、開拓使の至上命題であった。明治4年、今の北1条東1丁目あたりに、札幌病院が新築され、入院患者を初めて収容した。これが現在の市立札幌病院の創成期である。しかし、開拓使の事業の拡大速度が余りにも急だったため、開拓バブルが崩壊、財政困難に陥り、札幌病院の運営も縮小を余儀なくされた。そこで、それを補完する形で、明治7年頃

に、札幌に4名の開業医が初めて現れた。

江戸時代には医業は自由開業制で、医師の主流は漢方医であり、一部に、緒方洪庵のような西洋医学を学んだ蘭方医もいた。従って当時は、医師の資格、業務にはっきりした決まりはなく、不学無術の徒が、医業を営むことすらあったという。明治維新後、政府は西洋医学を採用し、このことを制度化するため、明治7年に『医制』が発布された。即ち、医師免許制と、医業開業の許可制度化の始まりであった。明治10年より、20年にかけて、明治政府は、急速な西欧化政策を推し進めた。しかし、その速度が急激で、国民生活の実情を無視し、国民に大きな生活の変化を強いることが少なくなかった。その上、いわゆる大久保利通に代表されるような、一部の藩閥官僚による「有司（上級役人）専制」が政治を行っているとして、不満の声が上がり、国内では、政府に反抗する気運が高まっていた。不平士族らによって、明治10年に西郷隆盛を擁して、西南戦争が起きたことは、あまりにも有名である。

その一方、板垣退助らが、自由民権運動を起こし、民選議院設立の建白書、つまり、国民による政治参加させるための運動を始めた。その動きに合せるかのように、国会開設の気運が起き、政党が成立、主義、主張を表立って行なう人々が、全国的に発生し、伊藤博文らにより、明治22年、明治憲法が発布された。そして、翌年、初めての議会が開かれた。そのような社会情勢に、あたかも呼応するかのように、明治23年（1890年）に、元札幌病院、副院長であった三田村多仲を会長とする会員16名の「札幌区開業医同盟」が結成された。ところで三田村氏は、元々、蘭学による産婦人科を修め、一時、京都で開業していたこともあったが、明治9年より、札幌病院に公務員として勤務、明治14年より、副院長となった。しかし、明治20年、東大医学部卒業の屋代善夫医学士が、札幌病院に勤務するや、その座を降され、即、札幌に三田村病院を開業した経歴を有している。

その頃は、まだ、伝染病に対する知識や衛生の考え方が未発達であったため、明治27年に起きた日清戦争で、日本軍17,000人の死者のうち、70パーセントが病死であった。富国強兵を旗頭にしていた政府の面目は丸つぶれとなり、窮余の一策として、明治28年、道庁（開拓使より組織変えとなっていた）に対し、戦時体制下、国民の保健衛生の重要性に考み、医師の医風の昂揚、公衆衛生の向上、伝染病の予防撲滅を図り、医会の活動を上げるため、公立病院医師を含めた医会とし、会員23名とした「札幌医会」を設立させた。ここに、開業医の思惑と国家の利害が合致した動きとなった。この時、会員相互間に、一定の診察料、薬価が、初めて定められた。

小説「赤ひげ」に代表されるように、江戸時代より、医師が患者に診療報酬を直接請求する習慣はなく、盆・暮に患者側より支払に来院して、同時に医師に対して、身分相応に謝恩の意を表したのであった。従って、当時としては、相当割り切った関係を、医師と患者の間に、初めて確立させたものと考えられる。

明治34年、元札幌病院長の関場不二彦医学士が、札幌医会会長となり、明治39年11月の内務省令33号「医師会規則」に基づく、許可設立による医師会が、明治41年に、「札幌区医師会」と名称を変え、会員44名による組織が出来上がった。ちなみに、この時の札幌市の人口は、66,000人余りであり、この医会には、その区域内医師が強制加入させられた。その設立目的は、「業務の秩序と風紀を維持し、医権を発展し、医事衛生に関する事項を研究し、その進歩を図る」となり、その後、100年を経た今日の医師会の設立目的も、全く同一となっている。ところで、関場不二彦は、元会津藩、士族出身であり、明治22年、東京大学医科大学卒業後、明治25年より、道庁出向を命ぜられ、28歳の時、札幌病院院長となっている。翌年、独立し、北海病院を開業、明治32年より、北辰病院と改称している。不二彦36歳の時、札幌区医師会長となり、以後、40年余りに亘り、会長を務め、死去している。

丁度、不二彦が、独立開業した明治26年に、大日本医会が、救療機関の普及、公衆衛生の向

上を主目的に、海軍の軍医総監、医務局長であった高木兼寛ら4名を中心に発会され、3,300名の会員から成る組織として立ち上げ、医師会運動のさきがけとなった。先程述べたように、丁度、帝国議会が開かれ、政党活動がさかんであった頃である。大日本医会は、関西方面の医師会と合併、帝国医会となった。明治35年、医師法の立案に、当時、官吏であった北里柴三郎が努力、議員立法で成立させた。この時の功績により、翌年、京都で第一回の帝国医会の総会があり、柴三郎氏が、会長に就任している。その後、各府県に医師会が出現、それら、すべてが帝国医会と併合、大正5年に大日本医師会（後の日本医師会）が設立されるのだが、会長職に、当初より、再三に渡り、柴三郎氏に要請をしていた。この頃の、大正3年、伝染病研究所の移管問題で、北里氏が官を辞するまでの柴三郎氏の言葉がある。「俺は学者である。そして、政府の官吏である。医師会は、政府と喧嘩する事が多いことを考えねばならぬ。会長になると政府と喧嘩しなければならないが、私が政府の役人で居ると、それは出来ない。だから、学者である事と政府の役人であるということで、私には不向きだからやめてくれ」として、承知しなかった。しかし、最終的には、この要請を受け入れ、初代会長となった。この時、すでに、医師会は、政府に対する圧力団体であったことが理解される。その後、大正11年に、健康保険法が、両院で可決成立し、昭和元年に、日本医師会と、社会局（後の社会保険庁）との間で、日本医師会による「団体請負方式」による診療契約が結ばれるに至った。

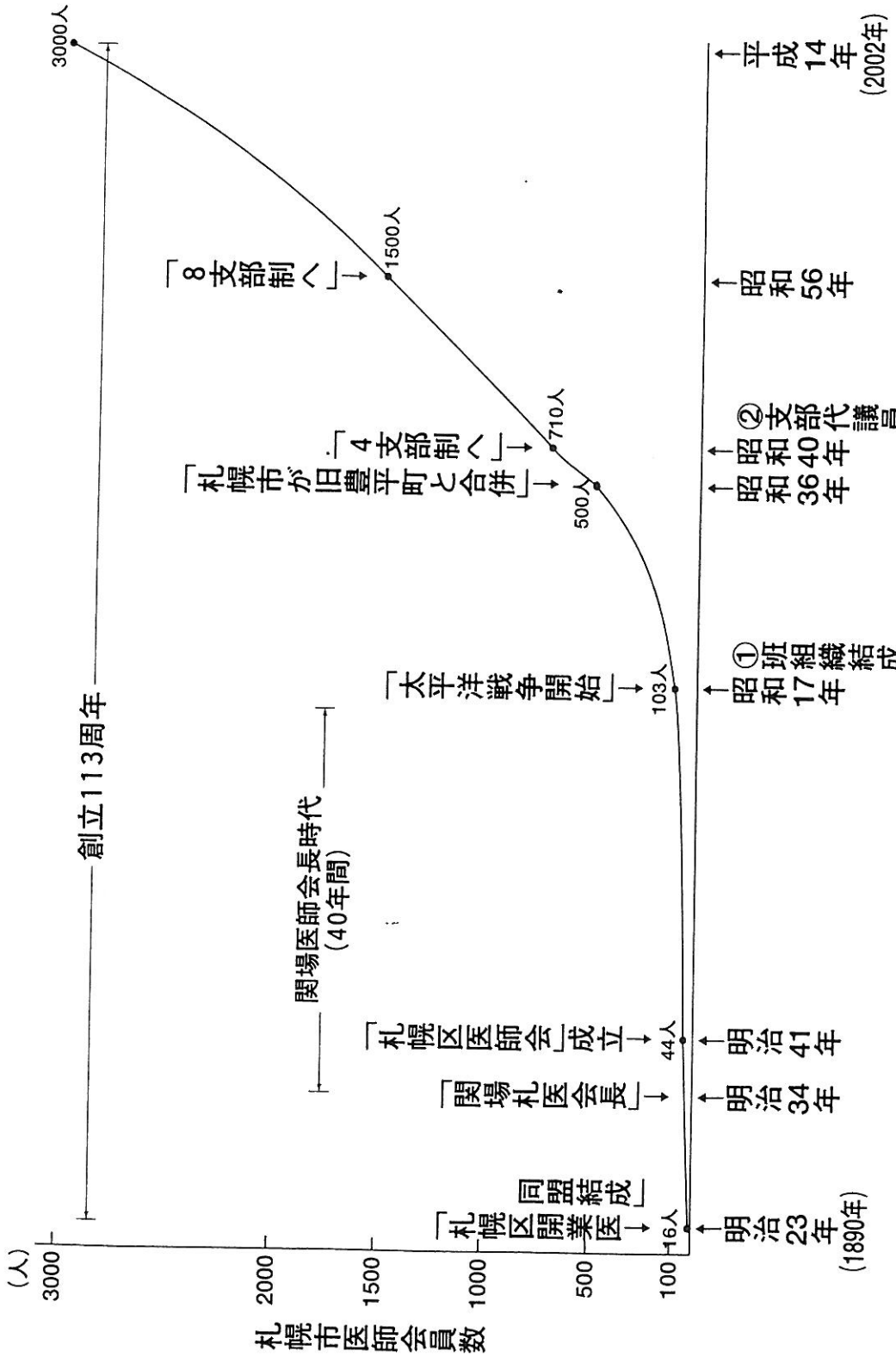
昭和16年に、太平洋戦争が勃発し、翌年、「医師会令」の勅令公布され、札幌市医師会が解散させられ、日医、道医師会の傘下に入った。国内のあらゆる機構と、国民生活は、国家総動員法のもと、対米英宣戦布告により、一挙に超戦時体制下に追い込まれた。医薬品配給の円滑な運用と、夜間往診当番制の確立を主な目的として、札幌市医師会は、班区分（隣組）化に組織変えさせられた。各種団体や業界の組織は、このような中央集権的な隣組組織に改組するよう強要されたが、皮肉にも、この事が、当時、札医会員数が急増局面にあり、事業執行体制や、情報伝達の合理化、地域的な会員間の親睦強化など、いわば、札医の組織強化策となったのだった。ちなみに、昭和17年の札医師会会員数は、103名で、病院所在地の近隣ごと、おおむね、10名位ずつ、10班に分区され、各班ごと、1名の班長が任命されていた。

戦後、昭和23年9月に「社保支払基金法」が公布され、今まで医師会内で、レセプトの審査や指導を自主的に行なってきた社保診療報酬の支払制度が、官僚統制下となり、これを機に、以後、保険料収入をめぐる国と医師会との戦いが開始され、昭和46年7月に、武見太郎日医会長時代の、保険医総辞退という究極的な事態を迎えていく引き金となったのである。

昭和30年代に入ると、札幌市は、急激に人口が増加し発展し始めた。昭和36年5月旧豊平町を合併すると、合併前の札幌市医師会員が、一挙に100以上増え、600名を越えた。従来の組織の意志決定では組織が持たなくなる危機感が生まれ、昭和41年4月より、四支部制へ移行、支部制代議員制に踏み切り、さらに、昭和57年、八支部制、さらに行政区の拡大に伴い、現在のような十一支部制となっている。現在、札幌市の人口は、医師会設立当初の30倍の180万人、医師会員数、不二彦会長時代の70倍の、3,000名を越え、今、尚、会員数は、増大の一途を続けているのである。

以上、札幌市医師会の100年の歴史を、次ページのごとく、時間の流れと、会員数に着目し、一覧表にしてみた。自分なりの時代考証を加え、分析してみたつもりである。さて、次回、後編では、以上述べた医師会の史実に基づき、私なりの考えを持って、今後の医師会のあるべき姿を描いてみたいと思う。

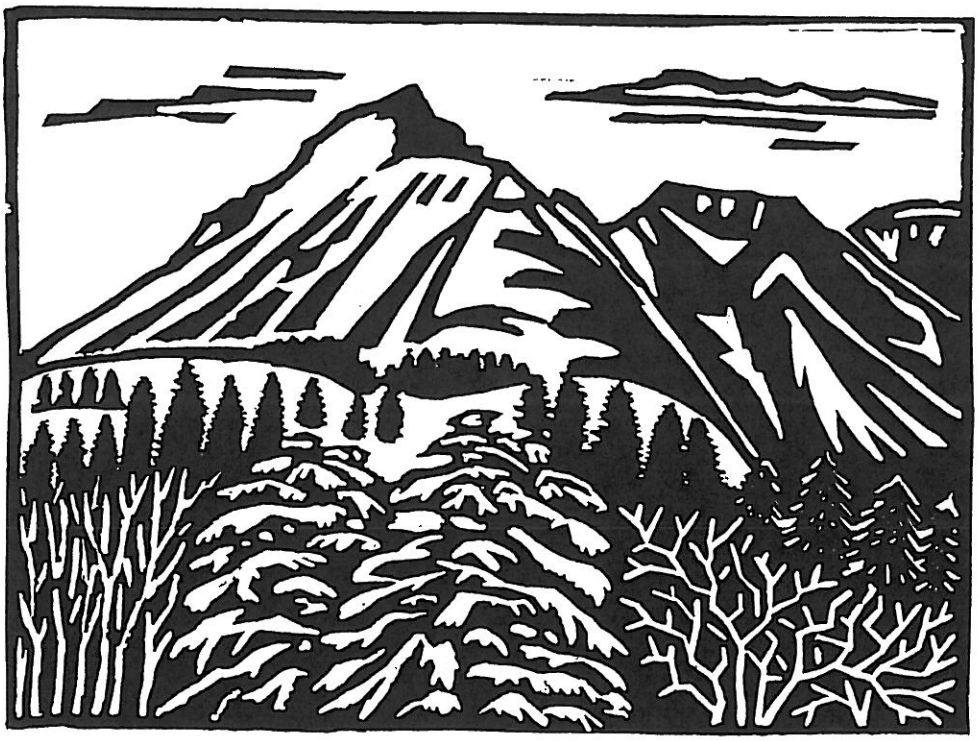
（平成15年　元旦　記）


(人)
3000
2000
1500
1000
500
100
札幌市医師会員数
3000人
1500人
710人
500人
103人
44人
16人
創立113周年
関場医師会長時代
(40年間)
「8支部制へ」→
「4支部制へ」→
「札幌市が旧豊平町と合併」→
「太平洋戦争開始」→
「札幌区医師会」成立→
「関場札医会長」→
「札幌区開業医同盟結成」→
←平成14年(2002年)
←昭和56年
←昭和40年 ②支部代議員制
←昭和36年
←昭和17年 ①班組織結成
←明治41年
←明治34年
←明治23年(1890年)

■参考資料■

1．札幌市医師会史　明治・大正編
昭和53年3月発行
2．札幌市医師会史　昭和編
昭和58年3月発行
3．札幌市医師会史　昭和完結編
平成8年3月発行
4．北海道医師会史
平成11年3月発行
5．詳説　日本史研究　五味文彦他編
平成10年発行　山川出版

（篠路整形外科）



及川慶文